

音源の比較試聴(20)
—ベルリオーズの幻想交響曲—

1. 始めに

前報(19)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果をも、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のエクトル・ベルリオーズの幻想交響曲を聴いていきます。

アナログ盤

EMI EAC 4007

オットー・クレンペラー指揮フィルハーモニア

DVD

ビクターエンターテイメント **VIBC-13**

ホール・フリーマン指揮チェコナショナル交響楽団

BD

NHK Enterprises NSBS-13457

小澤征爾指揮サイトウキネンオーケストラ

CD

ビクター **JMCXLR-0001**

シャルル・ミュンシュ指揮ボストン交響楽団

ドイツグラモフォン **POCG-1901**

チョン・ミュンフン指揮パリバステュー管弦楽団

STAGE+

グスターボ・ドウダメル指揮ロスアンジェルスフィルハーモニック

ベルリンフィルデジタルコンサートホール

ダニエル・バレンボイム指揮ベルリンフィル

クラウディオ・アバド指揮ベルリンフィル

ヘルベルト・ブロムシュテット指揮ベルリンフィル

アンドリス・ネルソンス指揮ベルリンフィル

パーボ・ヤルヴィ指揮ベルリンフィル

サイモン・ラトル指揮ベルリンフィル

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤のクレンペラー指揮フィルハーモニアは、1963年の録音ですが、グランカッサやチューバの低音楽器の量感も含め、時代を感じさせないクリアで迫力のある演奏です。

DVDのフリーマン指揮チェコナショナル交響楽団は、2003年の収録で、歯切れのよいきびきびとした演奏です。

BDの小澤征爾指揮サイトウキネンオーケストラは、小澤とサイトウキネンの熱演が伝わってきますが、上記のDVDおよび下記のCDと比べてみて、BDが一段抜け出しているという印象はなく、同レベルといってもいいかもしれません。

CDのミュンシュ指揮ボストン交響楽団は、1962年の録音で、当時のアナログの名録音とされたもので、CD化されても、その鮮度感は失われず、まるでアナログの優秀録音盤を聴いているようです。演奏もミュンシュの渾身の演奏であるかのように伝わってきます。

CDのミュンフン指揮パリバステュー管弦楽団は、歯切れのよいきびきびとした演奏で、同じCDのミュンシュ指揮ボストン交響楽団より、DVDのフリーマン指揮チェコナショナル交響楽団に似た音になり、デジタルマスターと言う点での相似性でしょうか。

STAGE+のドウダメル指揮ロスアンジェルスフィルハーモニックは、2008年収録のアルバムで、配信とは思えないほどワイドレンジで鮮烈な演奏です。特にグランカッサの一撃が部屋を揺らすような迫力があります。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのバレンボイム指揮ベルリンフィルは、2020年の収録で、コロナ対策のためか、奏者間の距離をとっており、メンバーの位置も指揮者を囲むようになっている無観客の演奏です。このため、通常より大ホールの響きの様子が変わっており、残響時間が長めに感じられます。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのアバド指揮ベルリンフィルは、2013年の収録です。音質的には直近の収録には及びませんが、演奏は最近のベルリンフィルの演奏と変わりません。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのプロムシュテット指揮ベルリンフィルは、2014年の収録です。コントラバスが第一ヴァイオリンの後方に位置し、ハープが上手にあるなど、パートの位置関係が変わっています。音質的には直近の収録には及びませんが、2013年の収録のアバド指揮と同等です。演奏は最近のベルリンフィルの演奏と変わりません。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのネルソンス指揮ベルリンフィルは、2016年の収録です。次のヤルヴィ指揮より4年前で収録年代が近く、演奏も音もヤルヴィ指揮と近似しています。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのヤルヴィ指揮ベルリンフィルは、2020年の収録ですが、1月の公演なのでコロナ対策はとられておらず、通常通りの演奏です。収録年が同じ、先のバレンボイム指揮の演奏と比べると、まぎれもなくベルリンフィルの演奏ですが、団員の配置が通常で、観客もいるので、これが通常のベルリンフィルの音であり、先のバレンボイム指揮の演奏が特異的な音と思われます。ベルリンフィルデジタルコンサートホールのラトル指揮ベルリンフィルは、1993年の収録で、若き日のラトルの指揮です。何故か、録音レベルが低く、ボリュームをかなり上げる必要がありました。収録年代が遡りますので、音質は直近の収録には及びませんが、それでも一定の水準は確保しており、演奏は最近のベルリンフィルの演奏と変わりません。

上記のようにベルリンフィルデジタルコンサートホールは六つの演奏を聴きましたが、30年間に及ぶ収録年代による音の違いも分かりましたし、コロナ対策の配置の変更や無観客の演奏の音が通常と異なることも分かりました。演奏については一貫していますが、5楽章の鐘の扱いは演奏ごとに指揮者の考え方を反映しています。

4. まとめ

いずれをとっても、アースアキュライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらにはAVドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、演奏の違いや収録年代や演奏メンバーの配置の違いなども把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上